

テッポウユリの花芽分化に関する研究 (第1報) 沖永良部島における花芽分化期

松川時晴・柏木征夫
(福岡県園芸試験場)

MATUKAWA, T. and KASHIWAGI, I.

Studies on the Flower Bud Differentiaion of *Lilium longiflorum*.

(1) Time of the Flower Bud Differentiation in Okinoelabu island.

テッポウユリの冷蔵効果の良否は球根産地の発育・成熟の良否に影響され、それらは花芽分化とその後の発育の早晚にも影響される。沖永良部島で昭和37年に2品種、40年に3品種、42年には4品種と3年間に花芽分化期を調査した。栽培は同島の慣行とし、現地でアルコール固定後、福岡に送って調査した。花芽分化期は小杉氏(1953)に従い花房分化期をもって定めた。

I. 結果の概要

年次差では‘ジョージア’は40年度が最も早くて2月1日に分化を認め、ついで37年度、42年度の順であった、これを気温からみると、40年度は平年なみであったが、37年度には分化前から完了までの12~4月に1~5℃低温で、成熟期の5~6月には逆に2℃高かった。また42年度には2~6月に2~3℃低温であったことがそのまま花芽分化の遅れとなって現われた。つまり促成球根の発芽も同様に40年度産はすぐれていたが37年度産はやや劣り、42年度産は特に全国的に不発芽を多発している。促成球根の発芽性はその年の球根成熟期(3~6月)の気温のほか、花芽分化の早晚も判定の一つの指標とみることができよう。

品種間差では‘殿下1号’が最も早く、40年度には2月1日に雄ずいの完成をみたほどである。ついで“ジョージア”、“佐伯30号”で差が明らかであった。しかし42年度には‘佐伯30号’が最も早く分化し、ついで‘ジョージア’で‘殿下1号’‘ひのもと’は同時に始まったが、その完成は現地の開花順序となり‘殿下1号’が最も早く、ついで“

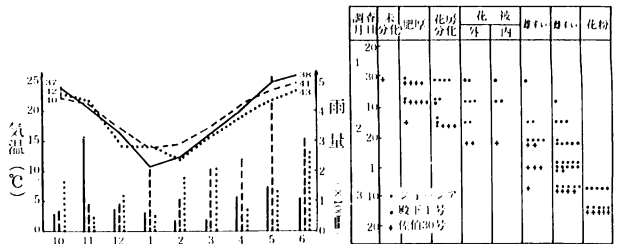
ジョージア”、“ひのもと”、“佐伯30号”で品種の差はきわめて少なかった。茎出根は12月下旬から認められ、花芽分化期とは一致しなかった。

以上から、沖永良部島では気温の年次変化が大きく、それにつれて花芽分化期も大きく変動しているといえる。

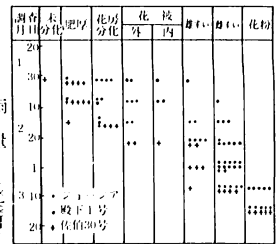
本研究の実施に当たり供試球根の栽培と送付にご協力頂いた鹿児島県和泊町役場・喜井利一氏および伊知地利夫氏また助力を頂いた鹿児島農試・小林正芳氏、糸島農高・西依武信氏に対し深謝する次第である。

調査日	未分化	肥厚	花房分化	花芽	被丙	雄ずい	雌ずい	花粉	つぼみ(42年)
1	20							
	30					
2	10	++++	oo	oo					
	20	++++		
	29		+	++++	o		
3	10							
	20	+37年度				++++	0.6
	30	+40年度				++++	0.7
4	10					0.9
	20					1.7
	30					2.7

第1図 花芽分化期の年次間差異(ジョージア)



第2図 沖永良部島の気温と雨量の年次差(知名測候所)



第3図 花芽分化の品種間差異(昭和40年度)